

朝鮮・ヒロシマ・

半日本人

わたしの旅の記録

朴 寿南



三省堂



朝鮮・ヒロシマ・半日本人

わたしの旅の記録

朴 寿南

三省堂

朴 寿南 (パク スナム)

著書とおもな仕事——1963・6『罪と死と愛と』(三一書房)
1964・3雑誌『若い朝鮮と日本』創刊1964・7 TVドラマ「半日本人」(制作NET) 1965・9「在日朝鮮人特集」(平凡社『太陽』)1967・5「在日朝鮮のこころ—半日本人の現実から」(筑摩書房『展望』) 1967・6「絶糧からの逃亡—ベトナムへ向かう韓国軍」(『日本読書新聞』) 1967・7「ヒロシマの姥捨山」(『潮流ジャーナル』) 1967・11「破壊された朝鮮人被爆者の人間性」(『朝日ジャーナル』) 1969・2「わたしの朝鮮人強制連行」(学芸書林『アンチ・ヒューマン』所収)



朝鮮・ヒロシマ・半日本人——わたしの旅の記録

SANSEIDO BOOKS 38

昭和48年8月15日 初版発行

定価 950 円

著 者◎ 朴 寿 南

発 行 者 株式会社 三 省 堂
代表者 亀 井 要

発 行 所 株式会社 三 省 堂
東京都千代田区神田神保町 1 の 1
電話 東京 (293) 3 4 4 1 (大代表)
振 替 口 座 東京 5 4 3 0 0

0336-661088-2774 <B 38 半日本人>

目次

黒いオルフェの旅——わたしのヒロシマ——……………

1

I もう一つのヒロシマ……………

9

へI章のためのノート

11

日本でも、広島にいる朝鮮人みたい貧乏なんはいないとちがうや
ろか……李玉順

20

ねぶったまんま死んでしまいたい、死なしてくれ、思うて寝るが

……石蓮伊

26

ピカにおうたもんは死刑囚と同じ、貧乏人ほど早死しますわ

姜

小竜

30

わたしら、いつこの子に原爆症出るか、心配でならんです

申

福守

38

主人は、原爆症とアル中で、精神的にもうだめになっているんで

す

匿名

42

わたしの望みといえば、毎日、牛乳一本飲みたい、それだけです

宋年順

48

Ⅱ 飢餓海峡

53

へⅡ章のためのノート 55

破れた「黄金の国」の幻想 へ文甲順 58

女は男の下、朝鮮人は人間の下よ へ石蓮伊 74

募集屋が連れてきた炭坑 へ金在浩 79

朝鮮人坑夫のストライキ へ柳寅奎 84

飯場放浪 へ呉鳳寿 91

ブランコと赤旗のうた へ林玉順 98

Ⅲ 煉獄に落ちた人びと

105

へⅢ章のためのノート 1 107

「協和会」の実態 へ元「協和会」幹部・H氏 118

炭坑地獄からの逃亡 へ呉鳳寿 124

——エピソード・あるばくち打ちの話 126

——エピソード・ある朝鮮人労務の話 130

——エピソード・ある徴用工の話 133

——エピソード・戦争末期の炭坑労働 135

へⅢ章のためのノート 2 140

予科練志願 へ姜小竜 141

Ⅲ章のためのノート 3 153

広島に來た徴用工〈金再根〉 154

Ⅲ章のためのノート 4 157

朝鮮人幹部候補生の手記〈郭貴勲〉 160

徴用・放浪・召集……原爆〈黃今達〉 170

Ⅳ 朝鮮人原爆被災

.....

Ⅳ章のためのノート 177

正気で生きておれんです、地獄みたものが……〈申福守〉 182

軍医がにらむんじゃ、「キサマ、鮮人だナ！」〈吳鳳寿〉 190

五人、子^オ死なしたですが、一人も骨、ひろえなかつたです……〈宋

年順〉 192

天地が目の中で燃え、「アッ」と火焰を呑んだみたいだった……〈金

再根〉 198

人間の焼けた口、石でたたいて、金歯ぬこうとするもんがおる……

〈宋秉九〉 202

私の涙は敗戦のくやし涙でなく、祖国解放の感激の涙だった〈郭

貴勲〉 207

V 廃墟からの再生 ……………

213

〈V章のためのノート〉 215

竹槍で襲ってきた日本人〈柳寅奎〉 229

劇場で開いた朝連結成式〈申福守〉 232

広島から朝鮮へ、再び広島、そして東京へ〈金徹〉 239

VI ヒロシマ・二つの朝鮮 ……………

259

〈VI章のためのノート〉 261

わしが若かったら、戦争、征くよ、ベトナムに……〈宋秉九〉 279

北鮮が自分らの国じゃいうが、先祖の墓も南鮮にあるんじゃ〈金

四竜〉 284

わしら、いうてみたら、旅の暮らしじゃけ……〈宋秉九〉 286

のこりの自分のいのち、祖国の平和統一に……〈申福守〉 289

わたし、共産主義の話きくと、からだに霜が立つです〈宋年順〉 295

朝鮮学校、奪られて、哀号！ 人間ダメにしてしまうた〈文甲

順〉 300

子ども、日本学校入れろいうが、あんたらの親切うらみます〈呉

VII 半日本人・被爆二世たち 311

へVII章のためのノート 313

民族の誇りにめざめるまでへ金聖姫 338

帰化——わたしは「日本人」になったへ久保道子 343

二つの「祖国」のはざまへ成美子 354

終りなき旅のしるべに——新たな地平を求めて..... 365

本文章扉写真——重田雅彦・藤川 清

黒いオルフェの旅

——わたしのヒロシマ——

たしかに、お前のうちには、未だかつて屈することを知らぬ何ものかがある。怒りが、欲望が、悲しみが、苛立ちが、また悔りが、暴力がある……そして今や、お前の血管が運ぶのは、黄金であって泥ではない、自尊心であって屈辱ではない。お前は王だった、以前は王であったのだ。

サルトル「黒いオルフェ」(全集『シチュアションⅢ』)

いまは、辱められていた過去を振り返るときではない、と、他人はいうだろうか。

いま、わたしたちがうたうべきは、「栄えある千里馬祖国」、共和国讃歌である、と——。

しかし、いま、わたしたちが身を置いている場所は、李珍宇を生み、金嬉老を生みつつけている、他人の国である。

自分であることからの逃亡、越境を企てながら、おのれ自身から離脱していったわたしたち、パン・チョッパリ―半日本人たちにとって、祖国、朝鮮のイメージは、つかみようがない遙かな彼岸にある。

朝鮮人、朝鮮に属している身元とその現実によって、この国のさまざまな場所から、締めだされ、しかも、自分を憎むこと、軽蔑することを教えてくれたこの国の同化を強いる文化に、まんまと自分の魂を盗まれた半日本人たちは、亡命を運命づけられた無国籍者、魂を屠^{ほふ}られ、生そのものから切り離された死者たちである。

過去は、わたしたちの現在の背後にあるばかりでなく、いまふたたび、わたしたちの状況を侵蝕している。

わたしたちを、この国の調和的存在にすべく、帰化、同化を政策として進めるこの国の政治、文化は、わたしたちの、自己であることへの復帰ばかりか、祖国への帰還そのものを否認するのだ。

この国がうたう「日韓新時代」とは、核時代の今日、核の暴力にもまして、わたしたちが人間存在として生きる、その魂の殺戮の布告、侵略の宣戦なのである。

わたしたちは、また、ふたたび、殺されかかっている。

異邦のように遠い父祖の土地へ還ることによって、この国の殺戮の現場から船出することは易い。しかし、この日本離脱につきまとう、逃亡のイメージの、救いがたい暗さは、何なのだろう。

殺す側の人間がいて、殺される側のわたしたちが在るこの国は、わたしたちにとって、まったく他

人の土地であらうか、わたしたちが生まれ、生い育ったこの場所が——よし、そこが、追放と否認を宣告されている土地であるにせよ——。

存在の根もとを奪われ、自分であることから引き剝がされている、わたしたち、半日本人とは、何者なのだろう。わたしは何者として生き、明日を拓くのか——。

わたしは、自分を取り返すために、わたしの存在の根源へ遡っていく。凌辱された母たちの胎のなか、植民地の悲惨を生きのびてきた父たちの恥辱と怨嗟、沈黙の暗闇にひっそりと閉ざされている子宮の底、魂の王道へ向かって——。

盗みとられていたわたしの魂の奪還、わたしが獲得すべき未来、帰還すべき居場所をもとめて——。

そして、残虐この上ない核兵器によって、子宮を灼かれた母たち、使役に繋がれたまま、原子の火焰のさなかを生き残った父たち、きょうだいたちの際会——人類悲惨の凄絶の極みを生きた恐怖を、忘却の奥深い深淵に沈めることによって生きのびている無言、化石したように重い沈黙と、仲間とよび交わしたこともない孤独との出会い——。

はじめ、それは、約束された訪問ではなかった。原爆に被災した朝鮮人は、広島はどこにもいなかったのだから——。日本人二人の同行者（小沢信男、藤川清氏）を道づれにした、最初の広島訪問（平凡社刊『太陽』一九六五年九月号「在日朝鮮人特集」のための取材）は、まず被爆した同胞を捜し出すことからはじまったのである。あれから八年、もう一つのヒロシマ、わたしたちにとって二重に侵された

歴史的な民族体験であるところの原爆被災の体験を、わたしたちはまだ取りもどしてはいはしない。

国際的な観光都市として、月に年に巨大化していく、かつての軍都の変容は、わたしたちにとってまぼろしの繁栄としか映らない。もう一つのヒロシマの真実は、茫漠とした「死のような廃墟」の荒野に、そして、帰還を約束した祖国が真つ二つに分断され、両方の国家からさえ打ち棄てられている現実に、ある。

わたしたちの民族的惨禍である原爆被災の体験もまた、わたしたちの魂を引き裂いている内と外の暴力によって、疎外されている。わたしたちの存在が盗まれているように、見えなくされているのだ。奪い返せずにいる責任は、わたしたち自身にある。他の誰よりもはじめに、それを視たこのわたし自身に――。

八年にわたる苦渋に満ちた旅の道中、わたしは、いくど、ヒロシマから逃げ出したい、そこに入りこんでしまったわたしを引き剝がしたい、と、念じたことだろう。

しかし、わたしは、ヒロシマから逃げきれものではない、ということ、それは自分自身からの逃亡であることを知っている。

わたしは、わたしたちのヒロシマを分割している境界に立って、危い綱渡りをしていた。わたしは、ヒロシマを切り裂く割目に身をさらしながら、矛盾することばと憎悪に隔てられている、引き裂かれた家族たちの、原爆体験の共有を確認し合う、ひとつの場所を捜しつづけたのである。

わたしは、自分の自我が割かれることなく、ひとつとして、おのれ自身として生きられる場所を、二つの世界をつなぐ橋の上に創ろうとしたのだった。わたしたちが帰属している国家からもまた、沈黙をしいられ、遺棄されている、もう一つのヒロシマに――。

だが、集団（内なる国家）のらち外にはみ出て在る、いわば異端者の作業は、“日本の中の祖国”を支配している二つの集団の主流との、痛苦に満ちた葛藤を抜きにしては、一步もすすまないものであった。

それは、わたしにとって、はじめての経験ではない。かつて、「人殺しの李珍宇」「恥さらしな朝鮮人」を、わたしたち、日本生まれのパン・チョッパリ、自己を盗みとられているきょうだいとしてとらえ、わたしたちの内部にすむ李珍宇の検証として問いはじめた一連の作業は、反集団的な言動ということで指弾され孤立に追いこまれたことがある。わたしたち自身の悪の告発――この国の支配に加担したもののたち、この国の隷属に屈服してしまった内部の責任の告発や、退廃と恥部に照明を当てることは、日本人のわたしたちにたいする偏見を助長、再生産するものであり……せつかくもりあがりつつある、善き日本人民との連帯を阻むものだ、ということがそのひとつの理由であった。

そして、もう一つの理由は、李珍宇がわれわれの世界に所属する住人ではない（かれの一家は、韓国籍を取得していた）ということであった。われわれの千里馬の解放区には、悪や犯罪が、矛盾や葛藤が存在してはならなかったのだ……。

集団の主流派の権威は、集団が帰属している国家の権威と一体のものであったから、集団から、反

集団分子として斬られることは、反国家、反革命分子として名ざして烙印を押されることであった。

集団は、みずからがかかっている理念、信条を、あきらかに裏切っている——この確信が、わたしにあったからこそ、わたしは集団にわが身を委任している同胞たちのふところにもとびこみ、母たちに抱かれたのであった。

しかし、わたしの旅は、しばしば妨げられ、不条理なトラブルを道づれにした。集団の主流派が掌握している地区からの暴力的な妨害、とくに広島「赤い解放区」からの追放、わたしの異議申立てに対する中央からの反応は、二年めによくやく実を結びかけた、同胞被爆者の組織づくり（朝鮮人・韓国人被爆者の声を聴く会。一九六七年八月、第一回、福島町福祉会館）と、調査活動の全面停止を通告するものであった（一九六七年七月、朝鮮総連中央常任委員会決定による）。

わたしを打ちのめしたのは、これらのわたしの作業にたいする否認が、栄えある社会主義祖国と、偉大なる領袖の名において宣告されたことであった……。かつてわたしの裂かれていた自我の同一性を、そこへ帰属することによってもとめようとした、わたしの祖国の名において――。

そして、もうひとつの、「反共」を国是にいただき、滅共統一の国家理念を内面化している集団との葛藤——対象によっては、「得体の知れないベルゲンイ（アカ）」であるよりは、「日本人」になりすまして際会することの方がはるかに容易であった——その後ろめたい憂鬱と、わたしの内面に負うた傷痕の深さ……。

わたしは、自分が属していた世界と、「ベルゲンイの脅威」に呪縛されている世界の境界に立って、

自分が何者であるのか、何者であるべきなのか、あらためてみずからに問いはじめなければならなかった。

断絶をしいられ、疎外からの回生を阻まれたまま、引き裂かれていたわたしたちのヒロシマは……わたし自身だった。ヒロシマからの逃亡は、わたしが、わたし自身から逃げ出すことを意味しよう。

わたしを抱きしめ、傷だらけの胎内に迎え入れてくれたのは、父や母たちの、存在を裂かれた苦悩であり、苦悩に満ちた孤独な現実であった。自己の存在の回復と統一をもとめて止まない思想現実そのものだった。

それは、わたしだけの希望でも虚妄でもない。もう一つのヒロシマの、本能的な自己回復の希求だったのである。

I もう一つのヒロシマ

